

資本主義を生み出す力となった思想・世界観

2011. 6. 9

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

≪前回の第4講義のふりかえり≫

- ①アテナイ期のギリシャ哲学者ーソクラテス、プラトン、アリストテレス
- ②その後、哲学は長く暗いトンネルの時代へー封建制社会は宗教的世界観が浸透
- ③キリスト教の発生は、被圧迫者の解放運動ーのちにローマ帝国の国教となり変質も
- ④哲学は、教会付属のスコラ哲学の枠内に閉じ込められる。

一。人間観の転換・・・ルネサンス



1。スコラ哲学の解体過程とその背景

◇スコラ哲学（前回講義レジュメより）

- *すでに確立され教会によって説かれているキリスト教の教義を、相互に矛盾しないように調整し、それらがなぜ真理であるかを論証することをその目的とした。
- *思索の自由の範囲はさらにせばめられる
- *すべての学問が、神学のもとにおかれた

→神学とは、「一定の宗教の教義を体系づけて、神ならびに神と人間との関係についての理論的形態をとった説明をするもの」（森宏一『新装版 哲学辞典』）

「中世は、神学に、その他すべてのイデオロギーー哲学、政治学、法律学ーを併合し、神学に従属する部門にしていた」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

「坊主が知的教養を独占し、そのために教養そのものが本質において神学的な性格をおびることになった」（エンゲルス『ドイツ農民戦争』）

なぜ？ と問うこと、疑うこと、という哲学的（学問的）態度の窒息。

◇支配階級としての宗教に変質したキリスト教

「ローマ・カトリック教会は封建制度を神の恩恵の後光でつつんでいた。それは、封建制をモデルにしてそれ自身の位階制を形成しており、最後に、それ自身がきわだって強力な封建領主であり、実際にカトリック世界の土地のまるまる三分の一を領有していた」（エンゲルス『空想から科学へ』英語版への特別な序文）

◇キリスト教世界のヨーロッパ人が、世界を知っていく

- *十字軍（ヨーロッパのキリスト教国が、聖地エルサレムをイスラム教国から奪還するために派遣した遠征軍。1096年から約200年にわたって行なわれた）によるイスラム文化との接触。アリストテレス哲学の流入。
- *古代ギリシャ・ローマの古典に接することができるようになる

2. ルネサンスの時代とその意味

◇14世紀イタリアではじまり、16世紀までヨーロッパ全体に広がる

*資本主義的生産が発達していたイタリアでは、商業資本家が、封建領主にまだ癒着しながらではあっても、いち早く社会の実権をにぎり、他国にさきがけて、14世紀後半から、いわゆる“ルネサンス”の時代を生み出していく。

*ルネサンスとは、「再生」「復活」を意味する言葉。文芸復興と訳されることも。

*その主役は、人文主義者（ウマニスト…英語ではヒューマニスト）たち

・「人間って、いいんじゃない」という人間観。教会が説く「禁欲」ではなく、人間の幸福の手段を別の方法で追求したり表現したりした。

「中世のヨーロッパでは、キリスト教（カトリック教）が絶対的な権威をもって君臨しており、すべてが『神さまくささ』の臭気をまとわされていました。人間はみな罪深いもので、人間の欲望はすべて悪、この世はあの世のためにある、といったお説教がいわば文化の中心をなしており、そうしたお説教に人びとはあきあきしながら、それとはちがった文化がありうるということを考える力さえ、ほとんどうばわれていたのです。そんななかで、ながらく忘れられていたギリシャ・ローマの古典を指さしながら、『ほら、ここにこんな人間くさい文化があるじゃないか！』と叫んだのが、ウマニストたちだったのです。

もともとイタリアには、かつてのローマ帝国発祥の地であり、ローマ帝国が東西に分裂してのちも、西ローマ帝国の中心でありつづけたのですが、その西ローマ帝国がゲルマン民族に滅ぼされてからは、古代ローマ文化の伝統とすっかり断ちきれてしまっていました。

しかし、十字軍の遠征などをきっかけとして、東方との交流がさかんになりだし、東ローマ帝国やイスラム世界に保存されていたギリシャ・ローマの古典に接することができるようになったとき、それに接した人びとは、そこに、これまでの神さまくさい文化とはまったくちがった人間くさい文化を見いだして、目を見はったのです。何しろ、そこでは神さまたちまでがひどく人間くさくて、みずみずしい肉体のもち主であり、恋もすればけんかもする、酒に酔っては馬鹿さわぎもする、というぐあいだったのですから」

（高田求『君のヒューマニズム宣言』学習の友社、1983年）

「現実の人間、生身の人間、それがヒューマニズムの土俵なのです。現実の人間、そこには弱さや、おろかさや、みにくさもいっぱいあります。同時に、それだけではありませんね。いろんな弱さや、おろかさや、みにくさにまといつかれながらも、花を愛し、キャンプ・ファイヤに夢中になり、不当なうちにはいきどおり——これも人間の現実の姿であり、人間の人間くさいところです。そういう人間の現実の姿全体をしっかりとふまえるということ——それがヒューマニズムの出発点です」（同前）



*ルネサンス期の代表的な人物・・・レオナルド・ダ・ヴィンチ

- ・1452年、イタリアのフィレンツェ郊外にあるヴィンチ村に生まれる。14歳で芸術の道へ。
- ・「モナ・リザ」「最後の晚餐」などが有名。
- ・彼は生涯に5000枚の手記を残している。その手記には、文学論、絵画論をはじめとして、自然に対する認識、数学、力学、天文学、建築土木、都市計画、軍事技術など、あらゆる分野にわたって、彼が知のエネルギーをそそいでいたことがわかる。



「レオナルド・ダ・ヴィンチは、偉大な画家であったばかりでなく、偉大な数学者・機械学者・技師でもあって、物理学のきわめて多種多様な部門が重要な諸発見をしたのは、かれのおかげなのである」（エンゲルス、同前）

「絵画に対する関心を深めれば深めるほど、デッサンの精密さが要求され、おのずから観察力がするどくなっていった（略）。また絵を描くには、遠近法の原理も必要となり、それにともなって数学も必要となった。彼の関心はますます拡がるとともに、何ごとにも徹底的に探求しなければ認識はできないと考えるまでになった。（略）また、ダ・ヴィンチは、鳥の飛び方について研究し、重さと密度の関係や、風圧が翼に及ぼす力の影響などの実験をし、力学運動にまで立ち入っている」

（『自然科学の古典をたずねて（上）』
新日本出版社）



レオナルド・ダ・ヴィンチ
「リッタの聖母」

「レオナルドがこれだけ完成度の高い女性像を描くことができたのは、彼の天才的な表現力もさることながら、彼が人体解剖に精通していたからである。彼は100体以上の解剖をしたといわれ、精緻な解剖図を残していることはよく知られている」
（立川昭二『生と死の美術館』）

- ・自然界が、力学的、機械的運動をしているのではないかと考えた。
「知恵は経験の娘である」
「2度3度それを試験して、その試験が同一の結果を生ずるか否かを観察せよ」
「実験から開始して、それによって理論を検証すること」
「まず科学を研究せよ、しかるのちにその科学から生まれた実際問題を追求せよ」

◇近代的思考そのものの誕生

「ルネサンスの時代は、近代的な文学、芸術の誕生の時代であっただけではなく、近代的な科学、技術、さらには近代的な志向そのものの誕生の時代でもあった」
（高田求『世界観の歴史』学習の友社）

「それは、人類がそれまでに体験したうちで最大の進歩的変革であり、巨人を必要とし巨人を生み出した時代であった。——思考力と情熱と性格とを、多才と博識とを、身につけた巨人を」 (エンゲルス『自然の弁証法』序論)

- ・ダンテ (詩人・哲学者・政治家)、ペラトルカ (詩人・学者)、ボッカチオ (詩人・作家)、ミケランジェロ (彫刻家・画家・建築家・詩人)、ラファエロ (画家・建築家)、ラブレール (作家・医師)、モンテーニュ (哲学者)、トマス・モア (法律家・思想家)、……。シェイクスピア (英国の劇作家・詩人) なんかも、ルネサンスの流れのなかでみることができる。



◇科学・技術を必要としていた資本

「中流階級の台頭と平行して、科学の偉大な復活がすすんだ。天文学、力学、物理学、解剖学、生理学がふたたび促進された。そしてブルジョアジーは、その工業生産の発展のために、自然物の物理的諸特性と自然力の作用の様式をつきとめる科学を必要とした。さてそのときまでは科学は教会のいやしい侍女でしかなく、信仰によって定められた限界をこえることはゆるされておらず、その理由によってまったく科学ではなかった。科学は教会に反逆した。ブルジョアジーは科学なしにはやってゆけなかったので、反逆にくわらなければならなかった」 (エンゲルス『空想から科学へ』英語版への特別な序文)

◇さらなる経済的土台の変革もすすむ

*交通と商業の発達—都市と商業資本の発達

*1492年、コロンブスがアメリカ大陸の近くの島に到達。1498年には、ヴァスコ・ダ・ガマがアフリカの南端をまわってインドに達する。

「アメリカの発見、アフリカ〔南端〕の迂回航海は、立ち上がりつつあるブルジョアジーに新しい地域をつくりだした。東インドおよび中国の市場、アメリカの植民地化、諸植民地との交易、交換手段〔貨幣〕および商品一般の増加は、商業、航海、産業にいまだかつてなかった興隆をもたらし、これとともに、崩壊しつつある封建社会における革命的要素に急速な発展をもたらした」

(マルクス『共産党宣言』)



二。唯物論的要素をおしすすめた、自然哲学者たち

「自然科学も、当時、自分の独立宣言を行なった。もちろんこれは、ルターが最初のプロテスタントでなかったのと同様に、いきなりはじめから独立宣言として出されたわけではなかった。宗教の領域でのルターによる破門状の焼却に相当するものは、自然科学の領域ではコペルニクスのあの偉大な著作〔の出版〕であった。このなかでかれは、なるほどおすおすと、36年間のためらいののちに、言ってみれば死の床で、ではあったにせよ、**教会の迷信にあえて挑戦したのである**。この時から、自然研究は、宗教から実質的に解放された。(略)この時から、科学の発展も巨人の歩みをもって進行した」(エンゲルス、覚え書き「歴史的事項」)

1. コペルニクス (1473年~1543年)

◇主著、『天体の回転について』(1543年出版)

◇経歴

- *ルネサンスの満開期に入ろうとしていたポーランドで裕福な商家の息子として誕生。父は10歳のとき他界。
- *天文学を豊かに学べる教育環境で育つ。18歳で、イタリアのクラコフ大学へ。当時、世界最高の天文学を学べる大学、ギリシャの古典研究もさかんだった。
- *この大学を卒業するときには、すでに天文学の改革の必要性を感じていたという。
- *じつは、地動説をとらえたのは、コペルニクスが最初ではなく、紀元前3世紀のギリシャ人、アリストタルコス、と言われている。そのアリストタルコスの説にコペルニクスはたいへん興味をしめし、自分の着想の元にしたと言われている。
- *彼は古代ギリシャ語にも精通し、ギリシャの哲学書や古典文学も読んでいた。数学的な原理や感性も、そこで磨かれた。また彼は、医師の肩書きももっていた。
- *人生の後半、彼は教会の仕事(司教管区の責任者・行政員)など、多方面での活動をみせるが、一方で天文学理論の実測的研究も行い、『天体の回転について』の草稿は1530年頃にはできあがっていた、と言われている。
- *しかし、彼はそれを公表するつもりはなかった。しかし弟子のレティクスから熱心な出版をすすめられ、「ためらいののちに」出版を決意する。「これは仮説にすぎない」という序文をわざわざつけたりもした。刷り上げた本を手にしたのは、彼の臨終の日だったと言われている。



◇『天体の回転について』のポイント

- *地球は動いている
- *火星とか木星とか土星と同じような、太陽の周りをまわっている惑星にすぎない。
- *宇宙の中心は地球ではなく、光り輝く太陽こそ宇宙の中心だ(←これは当時の認識の限界)

- *この主張を根拠づけるために、天文学理論・数学的・物理学的証明を、かなりの分量で書き綴っている。

「このような考え方は、教会で昔から認められてきておりました宇宙観、つまり宇宙の中心は神によって特別につくられた地球であるという考え方と相容れないものです。したがってこれをうかつに表沙汰にするということになりますと、おおいに物議をかもすおそれもあり、また思想的な混乱を起こすこともあるわけで、コペルニクスはそういうことを非常に心配したようであります」

(廣瀬秀雄「コペルニクスとその後の宇宙観」、

『コペルニクスと現代』所収、時事通信社、1973年)

- ・地動説は、コペルニクスが心配した通りに、キリスト教勢力から攻撃を加えられる(のには禁書に)。ルター(1483~1546)は、カトリック教会以上に、このコペルニクスの説を非難したと言われている。



◇相対化の積極的意義。ものごとを客観的にみる。

「コペルニクスの体系は、地球というものを惑星に転落させますが、それは同時に地球という惑星の発見であり、太陽系の真の姿の発見であるということです。これが天文学の地動説による革新でございます」(廣瀬秀雄、同前)

*地球というもの、人類というものが、相対化された

*これは、天文学だけの話ではない、大事な点

「コペルニクスのように、自分たちの地球が広い宇宙の中の天体の一つとして、その中を動いていると考えるか、それとも、自分たちの地球が宇宙の中心にどっかりと座りこんでいると考えるか、この2つの考え方というものは、実は、天文学ばかりの事ではない。世の中とか、人生とかを考えるとときも、やっぱり、ついてまわることなのだ。

(略)

人間がとにかく自分を中心にして、ものごとを考えたり、判断するという性質は、大人の間にもまだ根深く残っている。いや、君が大人になるとわかるけれど、こういう自分中心の考え方を抜けきっているという人は、広い世の中にも、実にまれなのだ。殊に、損得にかかわることになると、自分を離れて正しく判断してゆくということは、非常にむずかしいことで、こういうことについてすら、コペルニクス風の考え方の出来る人は、非常に偉い人といっていい。たいがいの人が、手前勝手な考え方におちいって、ものの真相がわからなくなり、自分に都合のよいことだけを見てゆこうとするものなんだ。

しかし、自分たちの地球が宇宙の中心だという考えにかじりついていて、人類には宇宙の本当のことがわからなかったと同様に、自分ばかりを中心にして、物事を判断してゆくと、世の中の本当のことも、ついに知ることが出来なってしまう。大きな真理は、そういう人の眼には、決してうつらないのだ」

(吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波文庫)

「それからもう 1 つ、宇宙という問題につきまして、それまでの天動説は、聖書に記されているところと一致しますので正しいとされてきたわけですが、このことは、それまでの世界では真理というものは聖書の中に書いてあるということでした。しかし、このコペルニクスの地動説が正しいとなると、必ずしもそうでないこととなります。真理というものは見かけのまま、つまり天動説というものは見かけのままですが、その見かけのままが必ずしも真の姿ではない。われわれは、やはりわれわれの目を働かせ、そして真の姿をつかまなくてはならない。地動説はそういうことを教えたものであるという具合に考えることもできるかと思います。

そしていままでのように真理は聖書の中にあるという考え方が、そうでなくなったのですから、社会全体のいろいろな問題につきましての価値観というものについて人びとに一考を促したわけでありまして、またそういう**権威**という**ものに盲従する**ということが、いかなる結果を引き起こすかというようなことも、コペルニクスは人びとに示したという具合に言うことができようかと思えます。

ですから地動説は単に天文学上の改革にとどまらず、ここに社会的、また思想的な大変革を生じたというようなことを、後世の人びとが申しまして、『コペルニクスの転回』というような言葉が使われるようになったのでございます」
(廣瀬秀雄、同前)

- ◇常識的なものの見方を疑う、問いかけることは、勇気がいる。
*時の支配者から、迫害や弾圧を受けることもあるなかで



「今日われわれはそうだと教えられているから、そう思うのであって、何も知らなければ、そういう恒星系全体が動いている、太陽も動いており、ほかの星も全部動いていると思うほうが、**直接の経験に忠実である**という意味であたりまえです。逆の考えをするということは、後になれば簡単なようではありますが、しかし、最初はなかなか受け入れられなかった。

(略)

彼の時代はルネサンスの時代です。ルネサンスは多くの天才を生んでいるけれども、ほかの天才とは非常に違う、孤立的な思想家であった。また天文学者の間でも、非常に孤立的な立場にあった。少数意見であった。そしてまたもちろんそれは聖書というそれまでの絶対権威と抵触する考え方であった。そういういろいろな理由から、**彼の説がそのときに多数の人によって認められたものではなかった**ということは、**きわめて重要であります**」

(湯川秀樹「コペルニクスと現代」)

『コペルニクスと現代』所収、時事通信社、1973年)

「**何かを自分でつくった人は、自分で疑っているんです**。できたものを信奉する人は、つくった人と同じような疑いを持っておらない。いつの時代でもそうですが、それはきわめて重要な違いです。

コペルニクスの場合はどうだったか、私はよく知りませんが、(略) 後世に対してさまざまな問題を提起している人です。ということは、コペルニクスもまた、ある1つのことを考えて、それをただ非常に単純に信じきっていたというような人ではなかったのだらうかと思えます」
(湯川秀樹、同前)

2. ジョルダノ・ブルーノ（1548年～1600年）

◇イタリア出身。ルネサンス期の自然哲学者、修道士。

◇コペルニクスの地動説に強い影響を受ける

* 著書『無限、宇宙および諸世界について』では、太陽さえも宇宙の中心とはいえず、無限の宇宙のなかに存在するととなえ、宇宙の無限性・永遠性を主張した。

* 知識を信仰に隷属させることに反対し、宗教的圧制に反対する闘争の生涯だった。

* さいごは、ローマ教皇庁に異端の罪で捕らえられ、ローマの「花の広場」で火あぶりの刑に処せられた。火刑の判決を言い渡されたときブルーノは、審問官たちにむかって、「判決をうける私よりも、判決を下す君たちのほうが真理の前にいっそうおびえているではないか」と言った。



3. ガリレオ・ガリレイ（1564年～1642年）

◇イタリアの物理学者・天文学者・哲学者。天文学の父。

* ピサの斜塔で落体の実験を行い、アリストテレスの自然学の誤りを正し、近代的力学の基礎をおいた。

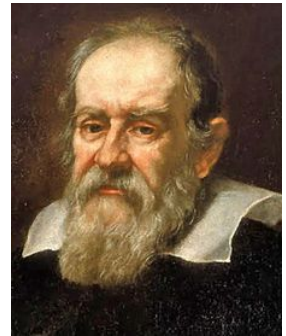
* 望遠鏡を発明（1609年）し、これを天体観測に応用。

* 月にも山が谷が！ 木星のまわりを4つの星がまわっている！ 太陽に黒い点！ 「完全なる天空」の崩壊。

* 数学への関心。道具・機械への関心。

* 種々の天文学的発見・力学法則の発見をするが、宗教裁判にかけられ、地動説の放棄を命じられた。

有罪となり、晩年はほぼ軟禁状態。ちなみに、カトリック教会が、このガリレオ裁判の誤りを正式に認め謝罪したのは、1992年のこと（死後350年）。



◇真理探究への情熱と姿勢、そのための一貫した行動

* どんな迫害を受けても、**真実は多数をつかむ**、という信念をもちつづけた

4. フランシス・ベーコン（1561年～1626年）—「知識は力なり」

◇英国の哲学者、法律家。

* マルクスは、ベーコンを「イギリスの唯物論とあらゆる近代の実験諸科学の真の祖先」「唯物論の第一の創始者」とよんでいる（『聖家族』）

* 先入観となっているさまざまな偏見から頭を解放せよ、そして忠実に自然を観察し、自然を「通訳」せよ。真実に到達するためには、何よりもまず経験を重視せねばならない。

* 物質の無限の可能性を花開かせるものとして科学・技術・産業にかぎりない信頼をよせ、それを人類の幸福のために活用するべきと主張した。

* ベーコンの夢 —— 『ニュー・アトランティス』



次回・・・第6講義は「資本主義を生み出す力となった思想・世界観—その2」